

氏名(国籍)	鄭 炳 浩 (韓 国)
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	博 甲 第 2473 号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	坪内逍遙の文芸論とその周辺
主査	筑波大学教授 名波 弘 彰
副査	筑波大学教授 博士(文学) 阿 部 軍 治
副査	筑波大学教授 博士(文学) 荒 木 正 純
副査	筑波大学教授 池 内 輝 雄
副査	筑波大学助教授 新 保 邦 寛

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、「実用主義」や「文芸無用」を唱える明治10年代の時代思潮の中で、坪内逍遙の文芸論が、いかなる経路をたどって形成されたかを考察したものである。

まず「本論文の目的と方法」についていえば、逍遙が文芸論を編成する際、当時の文芸が置かれていた状況、すなわち明治10年代にあつて強力な国家政策とも連動していた社会の近代化を強力に推進していた実用主義的言説といかに交渉し衝突しながら、それをみずからの文芸の論理として編成し直していったのか、その交渉・衝突を、同時代の言論界の言説の綿密な分析・比較を通して明らかに使用とするものである。その論証に当たって、著者は逍遙の文芸論の核心をなす概念に「美術」「真理」「イデア」「高尚」「美文(学)」があると認め、その概念の成立・受容・言説編成の際の意味変容をたどるかたちで逍遙の文芸論の成立を考察しようとする。

次に「本論文の構成と内容」についていうと、本論文は、序論・結章を除き、3部8章で構成されている。以下に本論文の章立てを示しておく。

### 序 章

#### I 近代的〈美術〉の概念の誕生と実用主義

##### 第一章 〈美術〉のイデオロギー

—明治10年代の美術界と『小説神髓』の交渉をめぐって—

##### 第二章 文学のジャンル意識の誕生とその周辺

—「美文学」という概念の誕生と「美辞学」・小考—

##### 第三章 〈美術〉における「高尚性」という領分

—『女学雑誌』の「文学・美術論」と「文明開化」への凝視—

#### II 実用主義の翻訳から芸術言語の翻訳へ

##### 第四章 実用主義の翻訳から芸術言語の翻訳へ

—芸術的翻訳思想の誕生とその周辺—

##### 第五章 小説の翻訳と理論の構築

一坪内逍遙の『開卷悲憤 慨世士伝』小考一

Ⅲ 坪内逍遙の文芸論における〈イデア論〉〈真理論〉の変容とその周辺

第六章 文芸用語としての〈真理〉のスペクトル

一坪内逍遙の文学論における「真理論」の言説編成の背景をめぐって一

第七章 文芸用語としての〈妙想〉のスペクトル

一坪内逍遙の文学論における「妙想論」の受容背景をめぐって一

第八章 〈虚〉の文学から〈実〉の文学への凝視

一二葉亭四迷の文学論における「真理論」の成立の背景一

結 章

内容についていえば、「Ⅰ」は3章から成り、逍遙が文芸論を築く際、当時の美術界や実用主義的言説において多様されていた「美術」「美」「高尚」という概念を、いかに自己の言説編成に取り込んでいったのかを扱っている。その考察に当たって著者は、概念語の成立段階の問題、受容する逍遙の文芸論の課題をそれぞれに緻密に明らかにしている。受容がそのまま概念語の意味変容となっていることが理解される。次の「Ⅱ」部は2章から成り、明治10年代に、翻訳小説が、内容本位の〈実用主義の翻訳〉から、原書の文体の趣きまでを緻密に訳そうとする〈芸術言語の翻訳〉を成立させたとし、その点を思想と実践の両面にわたって考察している。その考察において、思想での主張が必ずしも翻訳の実践にあっては実現しなかったことを分析している。その結論から著者は、翻訳においては同時代の言語・政治・文化が強い規制力をはたらかせて翻訳の文体・内容をともに変容させていること、またそれとともに、翻訳家のほうでも逆にその規制力を巧みに利用して日本人の〈知〉と日本文化に受け入れやすい翻訳をめざしたことが明らかになったと捉えている。さらに「Ⅲ」部は3章にわたって、逍遙と二葉亭四迷がそれぞれに、欧米の「イデア」(あるいは「<sup>アイジャ</sup>妙想」)論を「真理」として受容する過程を考察している。その過程においての概念の変容は、同時代の科学・哲学思想に対応するものであったとする。時代の要請はまさに実用的な〈学問〉に努めることであり、文学は「虚文」として現実社会にほとんど役に立たないという〈文学無用論〉が風靡していた。したがって逍遙・四迷の文芸論に認められる概念の変容は、そのような同時代の思潮に対抗するためであったとする。それゆえに、「真理」という概念は、小説で模写すべき真の対象を意味するとともに、現実の人間に〈実用的〉なもの、価値あるものとしても位置づけられていたと結論づけている。

最後に本論文は「結論の方向性及び今後の課題」という結章を設けているが、その中で本論文が目標とした課題を次のように整理している。明治10年代の実用主義的な言説、それに伴って主張されていた〈文学無用論〉の言説は、逍遙が文芸論を形成する際における一つの大きな条件となっていた。それゆえ、彼は西洋の様々な文学・芸術に関する知識を受容し、みずからの文芸論を構築するに当たり、実用主義的言説のコンテクストの風靡する中でみずからの主要概念を余儀なく変容させられることになった。そのことは換言するならば、彼の文学論のいくつかの中心概念は、少なくとも、当時の実用主義とせめぎ合う過程で形成されたと捉える。そのことは現代の翻訳語のように、欧米の文化・思想のコンテクストの中での意味をそのまま日本に移動させることはできなかったということで、西洋の様々な文学・芸術に関する著作の影響と、彼の置かれていた状況とのせめぎ合いによる交渉・衝突の中で翻訳語はわが国の語彙として形成・定着されたといわざるを得ないと結論づけている。本論文で考察したとおり、それに当たるのが、「美術」「真理」「妙想」「高尚」という概念であった。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文が従来の当該の研究と異なるのは、逍遙の文芸論の確立が二つの段階を経たと捉えるところにある。すなわち第一の段階は、西洋近代の文芸と理論の受容の段階、第二の段階は、その受容に当たって、同時代の時代

思潮との交渉・衝突の段階を経ていると仮設し、その二段階の過程を経て逍遙の文芸論は形成されたと構想する。このように仮説するとき、従来の研究の多くが第一段階に集中していたということがわかる。それに対して本論文は、第二段階の時代思潮との交渉・衝突の中で逍遙の文芸論がいかに成立していったかを考察するものであった。その点では従来の研究の空白部を埋める労作となっている。日本近代文学の誕生というきわめて重要な文芸史・文化史の画期には学問的蓄積があることはいうまでもない。したがってその領域にあって新たな空白部を発見し、そこを対象に新たな知見を学界に提供し得たとすれば、学界にとって貢献となるといえる。その意味で、本論文は逍遙の文芸論のキーワードとなる用語の成立・受容・文芸論の言説編成への位置付けの過程における変容を丹念にたどり、その用語の成立時の意味が逍遙の文芸論に至るまで、いかに変容したのかを跡付けるという作業は、たんに等質のテキストの分析によるものではなく、同時代の言論界、メディアにおける異質のテキストの分析にわたるものであった。それは逍遙の文芸論を文芸史の枠組みの内部でその価値を認定するにとどまらず、すでに指摘したように、同時代の文化の枠組みの中において逍遙の文芸論がいかなる位置を占め、かつ意味をもつのかを明らかにするものでもある。いってみれば、単なる文芸論研究を超えて、日本近代において翻訳語と格闘した知識人の〈知〉の軌跡をたどる地平をも見透かそうとしている。

ただ本論文にも問題あるいは課題がないわけではない。第一には逍遙の文芸論の主要な用語の成立・受容・変容のプロセスの考察が緻密であればあるほど、かえって文芸論の言説編成全体の枠組みの変容がどう見通せるようになるのかが問われるはずであるのに、その点の考察が用語分析よりもおろそかにされているように見受けられることが惜まれる。第二に本論文が文芸の営為を、より大きな文化史の枠組みの中に据え直そうと意図している以上、同時代の啓蒙主義思想の言説に対してはもっと幅広い資料にまで視野を拡げる必要があると考えられるが、その点が物足りない。著者の視座からしても、本論文を展開し深化するためには、その方向の探求は今後とも要請される。第三に本論文の対象とする領域には重要な先行研究が多いのだが、その量の多さ、範囲の広さのためか、著者にはまだ消化し切れなかった点が認められるのが惜まれる。今後の研鑽に期待したい。

しかし本論文は、以上の問題があるにしても、逍遙の文芸論研究に空白部があること、それを埋めるにいかなる視座と方法論が必要かを提起し得たこと、そしてその提起を实践したことなどが本論文の価値を高めている。その点からも、本論文は地味な実証的研究ではあるが、対象に文化領域のテキストを採用するという斬新さゆえに優れた知見の獲得となっている。本論文は、学位論文として十分に価値のあるものである。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。